

大学生の「自己教育力」と「学力」との関連

宮 慶 美恵子

大学生の「学習習慣」や「学習意欲」「自己教育力」と「学力」との間に、関連性が見られるかを調査することを主な目的とした。結果、「学習習慣」や「学習意欲」と「学力」との間に関連性は見られなかった。しかし、「自己教育力」と「学力」との間には関連性が見られ、「自己教育力」がある学生は、そうでない学生に比べて「学力」が身に付いていることが示唆された。このことから、大学生にとって「自己教育力」を修得することが、「学力」を育成する上で大切な要因になると考えられる。

キーワード：学習習慣、学習意欲、自己教育力、学力

The main objective of this study is to investigate the associations between university students' "learning habits," "learning motivation," "self-learning ability," and "academic ability." While no correlation was found between "learning habits," "learning motivation," and "academic ability," a correlation between "self-learning ability" and "academic ability" was observed, suggesting that students who have acquired "self-learning ability" are more equipped with "academic ability" than other students. This also indicates that acquiring "self-learning ability" is an important factor in fostering university students' "academic ability."

Key words : Learning habits, Learning motivation, Self-learning ability, Academic ability

I はじめに

大学や短期大学等の高等教育機関は、高等学校までにおける教育以上に、学生自らの意思により主体的に学ぶ意欲や姿勢が強く求められる。また各大学では、学生が卒業する時、最低限必要とされる能力として、ディプロマポリシーが掲げられ「主体性・自立性・自律性」「知識・理解」「思考・判断」「技能・表現」「態度・志向」などの各方面からの到達目標が示されている。2012年の中央教育審議会答申における「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」¹⁾によれば「教員は授業において、学生の知的・人間的能力を開花させる質の高い教育を展開させる責任がある」とし、学修意欲の高揚及び主体的な学修の確立の必要性を述べている。

浅野²⁾(2002)は、変化の激しい現代社会において、大学教育のみならず生涯に亘って学習は必要

とされ、その生涯学習に参加し続けるためには、積極的に学習に取り組む姿勢のみならず、学習を継続しようとする意志が重要になってくることを述べている。また溝上³⁾(1996)は、「学習意欲」は心理学における「外発的動機づけ」と「内発的動機づけ」に分類できるが、前者は学習自体が目的ではなく、単位を取るための手段となり、授業もただ受けているだけとなりがちな点を指摘している。しかし小山⁴⁾(2015)は、教員と学生とのコミュニケーションを強化することによる「外発的動機づけ」や、提出物へのフィードバックによる「内発的動機づけ」、さらに教員や外部講師による体験談の披露等を実践していくことなどが、学生の「学習意欲」の向上に繋がっていく点を示唆している。さらに吉澤ら⁵⁾(2009)は、授業方法の工夫によっても「学習意欲」が向上する点を示唆している。具体的にはグループディスカッション等を行う際、グループ内の学生同士の交流が、自分と異なる知識や視点を有する人との相互作用の中で、

「学習意欲」を向上させるといった点である。

「自己教育力」に関しては、1983年の中央教育審議会における教育内容等小委員会の報告⁶⁾により「主体的に学ぶ意志、態度、能力などを言う」と定義されている。西谷ら⁷⁾(2004)は「自己教育力」の育成に有効な教育方法を検討するための調査において『大学教育は、相当の自学自習を前提として成り立つものであり、学生にとって自ら学ぶ力である「自己教育力」は欠かせない』点を指摘している。しかし、学生の実態として、授業中にスマートフォンを見たり、友達と喋ったり、授業科目以外のレポート課題を講義中に書いたりするなど「主体的に学ぶ意思、態度、能力」などとされる「自己教育力」とは程遠い姿も散見される。

「学習習慣」に関して當山ら⁸⁾(1998)は、高校生を対象に「学習習慣」に関する調査を実施しているが、その調査において、高校3年生は1年生に比べて「学習習慣」が身につけているといった調査結果を導き出している。しかし大学生がどの程度の「学習習慣」や「学習意欲」を持ち、またどの程度「自己教育力」を取得しているのかといった具体的な調査は見当たらない。

そこで本研究は、A大学B学科の学生を対象に、学生の「学習習慣」や「学習意欲」「自己教育力」の実態を調査し、これらが「学力」と関連が見られるかどうかを調べることを主な目的とした。

II 調査方法

1 調査時期及び対象

2020年7月、A大学B学科の「児童保健学Ⅰ」「児童保健学Ⅱ」【現科目名「子どもの保健」(2019年度以降入学の学生)、2018年度以前の学生は「児童保健学Ⅰ」「児童保健学Ⅱ」】を受講していた学生68名を対象に、「学習習慣」や「学習意欲」「自己教育力」に関する質問紙調査を実施した。その内、有効回答があり且つ有効な成績評価が得られた53名を調査対象とした。なお、「児童保健学Ⅰ」と「児童保健学Ⅱ」は、保育士養成に関わる必須科目であるため、対象学生68名のほとんどが「児童保健学Ⅰ」と「児童保健学Ⅱ」の両方の科目を受講していた。

2 調査内容及び方法

大学生の「学習習慣」や「学習意欲」「自己教育力」に関する質問紙調査を、ICT機器を使って実施した。内容については以下の通りである。

1) 「学習習慣」に関しては、當山ら⁸⁾(1998)の「学習習慣尺度」の14項目を使用した。この尺度は、「日常的学習習慣」の7項目と、「積極的学習習慣」の7項目から構成されている。「日常的学習習慣」の内容は、「出された宿題は、きちんとやりますか」「学校で習ったことは、その日の内に復習しますか」「次の日の授業の予習をしますか」などの内容から構成されている。また「積極的学習習慣」は、「勉強でわからないことがある時、先生に質問しますか」「授業中、先生の話を受けないことがありますか」「授業中、ノートはちゃんととっていますか」などの内容で構成されている。

2) 「学習意欲」に関しては、浅野²⁾(2002年)の「学習意欲尺度」の5項目を使用した。その内容は「自分では学習意欲は高い方だと思いますか」「勉強は好きですか」「できるだけ長く勉強を続けたいと思いますか」「常に学びたい気持ちがありますか」「自分では積極的に学習していると思いますか」などの5項目から構成されている。

3) 「自己教育力」に関しては、森ら⁹⁾(2000)の「自己教育力尺度」の35項目を使用した。この尺度は7つの下位尺度「課題意識」「主体的思考」「学習の仕方」「自己評価」「計画性」「自主性」「自己実現」から構成され、具体的には「課題意識」は「授業中わからないことがあれば後で勉強したり調べたりしますか」、「主体的思考」は「不思議なことがあれば自ら進んで調べようとしますか」、「学習の仕方」は「本を読む時、大切なところは線を引いたり図表にまとめたりしますか」、「自己評価」は「試験の成績が悪かった時、どこがわかっていなかったか反省したりしますか」、「計画性」は「勉強する時よく考えてからとりかかりますか」、「自主性」は「授業中に自ら進んで意見を発表しますか」、「自己実現」は「自分の不得意なところを改善しようとしますか」などの内容で構成されている。

4) 対象学生の「学力」に関しては、2020年度前期に「児童保健学Ⅰ」で実施した小テスト2回分(各100点満点)と、2020年度後期に「児童保健学Ⅱ」で実施した小テスト2回分(各100点満点)を合わせた合計得点を「学力」とした。ここでの「学力」は、小テストを中心とした「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を内包するものである。

3 分析方法

當山ら⁸⁾(1998)の「学習習慣尺度」の14項目を、3件法(0=「いいえ」と回答、1=「どちらとも言えない」と回答、2=「はい」と回答)で尋ね、実践状況に合わせて(「いいえ」=0点、「どちらとも言えない」=1点、「はい」=2点)得点化した。また、逆転項目に関しては、点数を入れ替えた。さらに、14項目の合計得点を「学習習慣」得点とし、その合計得点が高くなるほど、「学習習慣」があるものとみなした。また、各尺度の α 係数を求め、尺度の信頼性を確認した。「学習意欲尺度」の5項目に関しては、4件法(0=「全く当てはまらない」と回答、1=「あまり当てはまらない」と回答、2=「まあまあ当てはまる」と回答、3=「全くその通りである」と回答)で尋ね、実践状況に合わせて(「全く当てはまらない」=0点、「あまり当てはまらない」=1点、「まあまあ当てはまる」=2点、「全くその通りである」=3点)得点化した。また、その5項目の合計を「学習意欲」得点とし、合計得点が高くなるほど、「学習意欲」があるものとみなした。また、「学習意欲尺度」5項目の α 係数を求め、尺度の信頼性を確認した。「自己教育力尺度」35項目に関しては、2件法(0=「いいえ」と回答、1=「はい」と回答)で尋ね、実践状況に合わせて(「いいえ」=0点、「はい」=1点)得点化した。また、下位尺度毎に合計得点を算出し、それらを「課題意識」得点、「主体的思考」得点などとした。さらに下位尺度7つを合計したものは「自己教育力」得点とし、合計得点が高くなるほど、「自己教育力」があるものとみなした。また、下位尺度の7項目の α 係数を求め、尺度の信頼性を確認した。

「学習習慣」や「学習意欲」「自己教育力」と「学力」との関連に関しては、「学習習慣」得点、「学習意欲」得点、「自己教育力」得点を平均値 \pm 1SD

で3区分した上で、一要因の分散分析を行った。

4 倫理的配慮

質問紙調査に当たっては学籍番号のみを記入してもらい、授業の評価とは一切関係がないこと、またこれらは研究目的以外には使用せず、使用後のデータは破棄することを文面で伝えた。なお、本研究はA大学、研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:2021-05号、承認日:2021年5月17日)。

III 結果

1) A大学B学科の学生の「学習習慣」「学習意欲」「自己教育力」得点の実態

A大学B学科における学生の「学習習慣」得点の範囲は2~28点であり、平均値は 18.72 ± 5.11 であった。また、「学習習慣」得点が平均値以下の人たちは36.8%、-1SD以下の人達は15.8%いた(図1)。次に「学習意欲」得点の範囲は0~12点であり、平均値は 6.39 ± 3.09 であった。また、「学習意欲」得点が平均値以下の人たちは49.1%、-1SD以下の人達は17.5%いた(図2)。さらに、「自己教育力」得点の範囲は7~34点であり、平均値は 22.56 ± 5.67 であった。また、「自己教育力」得点が平均値以下の人たちは40.4%、-1SD以下の人達は15.8%いた(図3)。

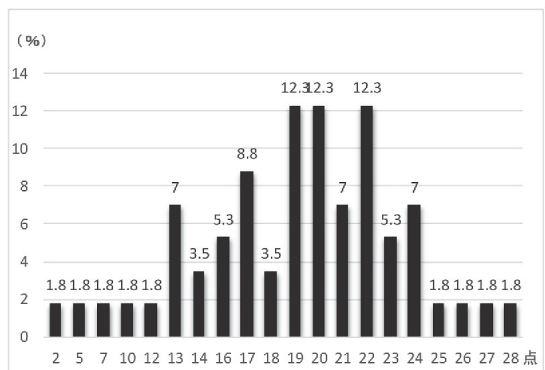


図1 「学習習慣」得点の分布と割合

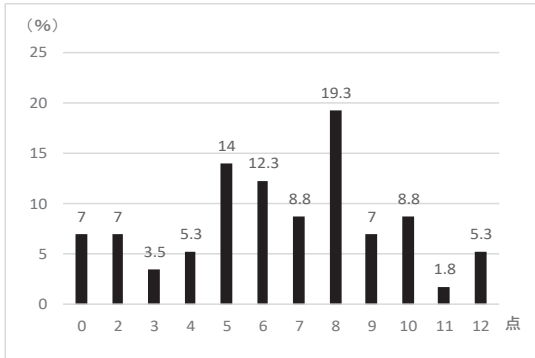


図2 「学習意欲」得点の分布と割合

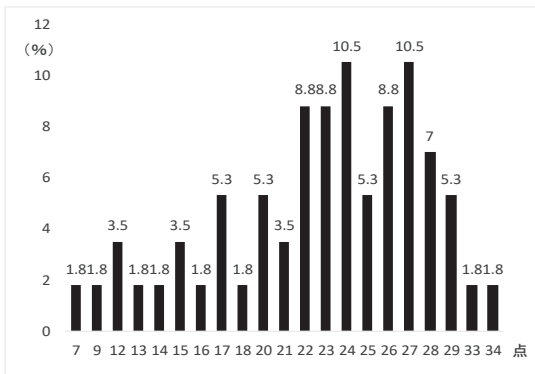


図3 「自己教育力」得点の分布と割合

2) 各尺度のα係数

「学習習慣尺度」「学習意欲尺度」「自己教育力尺度」それぞれの尺度の信頼係数はすべて0.8以上であった(表1)。

表1 各尺度のα係数

尺度	α係数
学習習慣尺度	0.840
学習意欲尺度	0.836
自己教育力尺度	0.816

表2 「学習習慣」得点と「学力」との関連

	(1)「学習習慣」低群 n=9		(2)「学習習慣」中群 n=36		(3)「学習習慣」高群 n=8		F値	P値
	M	SD	M	SD	M	SD		
学力(得点)	266.11	59.15	291.67	44.22	290.00	33.17	1.15	0.33

3) 「学習習慣」「学習意欲」「自己教育力」得点の男女間の差

「学習習慣」得点や「学習意欲」得点、さらには「自己教育力」得点に、男女間で差が見られるかt検定を行った。結果、いずれも有意差は見られなかった(p=0.34~0.85)。

4) 「学習習慣」得点低、中、高群と「学力」との関連

「学習習慣」得点を平均値±1SDで3区分し、平均値-1SD以下を(1)「学習習慣」低群、平均値+1SD以上を(3)「学習習慣」高群、その間を(2)「学習習慣」中群として、一要因の分散分析を行った。結果、「学習習慣」低、中、高群と「学力」との間に、関連性は見られなかった(p=0.33)(表2)。

5) 「学習意欲」得点低、中、高群と「学力」との関連

「学習意欲」得点を平均値±1SDで3区分し、平均値-1SD以下を(1)「学習意欲」低群、平均値+1SD以上を(3)「学習意欲」高群、その間を(2)「学習意欲」中群として、一要因の分散分析を行った。結果、「学習意欲」低、中、高群と「学力」との間に、関連性は見られなかった(p=0.32)(表3)。

6) 「自己教育力」得点低、中、高群と「学力」との関連

「自己教育力」得点を平均値±1SDで3区分し、平均値-1SD以下を(1)「自己教育力」低群、平均値+1SD以上を(3)「自己教育力」高群、その間を(2)「自己教育力」中群として、一要因の分散分析を行った。結果、「自己教育力」低群と「自己教育力」中群との間に有意差が見られ、「自己教育力」中群の「学力」は、低群に比べて優位に高

表3 「学習意欲」得点と「学力」との関連

	(1)「学習意欲」低群		(2)「学習意欲」中群		(3)「学習意欲」高群		F値	P値
	n=10		n=35		n=8			
	M	SD	M	SD	M	SD		
学力(得点)	268.00	53.91	290.00	47.12	298.13	18.31	1.18	0.32

表4 「自己教育力」得点と「学力」との関連

	(1)「自己教育力」低群		(2)「自己教育力」中群		(3)「自己教育力」高群		F値	P値	多重比較
	n=9		n=39		n=5				
	M	SD	M	SD	M	SD			
学力(得点)	250.00	50.87	294.49	43.22	296.00	24.08	3.97	0.03	(1) < (2)*

注)* p<0.5

かった (p = 0.03) (表4)。

IV 考察

今回調査したA大学B学科の約4割の学生は「学習習慣」得点が平均値以下であり、16%の学生は-1SD以下であった。「学習意欲」に関しては、約5割の学生が平均値以下であり、17.5%の学生は-1SD以下であった。さらに「自己教育力」に関しては、40.4%の学生は平均値以下であり、15.8%の学生が-1SD以下であった。これらのことから約4割の学生は、「出された宿題はきちんとやる」「学校で習ったことはその日の内に復習する」などの「日常的学習習慣」や、「勉強でわからないことがあった時、先生に聞く」「テスト前に計画を立てて勉強する」などの「積極的学習習慣」が定着していないことが推察された。長谷部¹⁰⁾(2009)は、基礎的な学力を習得するには日常的に学習に向かうことを習慣化していることや、理解や記憶の手段としての初歩的な学習方略を身に付けていることが大切である点を指摘している。このことから、A大学B学科の「学習習慣」得点が平均値以下の学生は、基礎的な学力や初歩的な学習方略を身に付けていない可能性が推測される。

大学生の「学習習慣」得点や「学習意欲」得点と「学力」との間では、今回の調査では有意差は見られなかった。しかし、有意差は見られなかったもの

の、「学習習慣」得点低群に比べ「学習習慣」得点中群や高群の方が「学力」(得点)は高く、さらに「学習意欲」得点低群に比べ「学習意欲」得点中群や高群の方が「学力」(得点)は高かった。「自己教育力」に関しては、「自己教育力」得点中群の人達は、「自己教育力」得点低群の人達に比べて、「学力」(得点)が有意に高かった。このことは、「学習習慣」や「学習意欲」よりも、「自己教育力」を修得することが「学力」を育成する上で大切であることを示唆した内容と言えよう。

1983(昭和58)年の中央教育審議会における教育内容等小委員会の報告⁶⁾で、今後の「新たな社会の変化や新たな課題に取り組むためには、主体的に変化に対応する能力や、個性的で多様な人材が求められる」ことが示され、そのような中でも大切なのが「自己教育力」の育成である点が述べられている。ここでの「自己教育力」の概念としては、「主体的に学ぶ意思、態度、能力」であり、その具体的な要素として「学習意欲」「学習の仕方(何をどのように学ぶのか)」「生き方(生涯にわたって教育し続ける意思の獲得)」の3点があげられている。また吉澤ら⁵⁾(2009)は、授業方法の工夫によっても、学生の「学習意欲」の向上に繋がる点を示唆している。

本研究においては、「自己教育力」を修得することが「学力」の育成に繋がることを示唆された。このことより、学生は「自己教育力」の構成要素で

ある「学習意欲」や「学習の仕方」「生き方（生涯にわたって教育し続ける意思の獲得）」の修得も欠かせない。また教師側も「学習意欲」を感じさせるような授業方法の工夫が必須と言えよう。

V 結論

A大学B学科の約4割の学生は「学習習慣」得点や「自己教育力」得点が平均値以下であり、「学習意欲」得点に関しては、約5割の学生が平均値以下であった。「学習習慣」や「学習意欲」「自己教育力」と「学力」との間に関連性が見られるか調査した結果、「学習習慣」や「学習意欲」と「学力」との間には関連性は見られなかった。しかし、「自己教育力」と「学力」との間には関連性が見られ、「自己教育力」を修得している学生は、そうでない学生に比べて「学力」が高いことが示唆された。以上のことから、大学生にとって「自己教育力」を修得することが、「学力」を育成する上での大切な要因になると考えられる。

VI 今後の課題

今回の調査は、A大学B学部における少人数の学生を対象とした調査であった。今後は同系列同学部の学生を対象とした大規模な調査を実施し、今回の調査結果との比較検討を行いたい。

謝辞

本調査に協力してくださった学生の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 1) 中央審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」、2012
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin、(閲覧日 2021年1月10日)
- 2) 浅野志津子：「学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程—放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から—」『教育心理学研究』50(2)、141-151、2002
- 3) 溝上慎一：「大学生の学習意欲」『京都大学高等教育研究』2、184-197、1996
- 4) 小山知子：「動機づけと自己効力感の変化が大学生の学習意欲に与える影響」『多摩大学紀要』7、63-74、2015
- 5) 吉澤隆志・松永秀俊・藤沢しげ子：「授業形式の違いが学習意欲に及ぼす効果について—グループディスカッション授業の効果」『理学療法科学』24(3)、369-374、2009
- 6) 文部省編：「自己教育力の育成などの視点を提起—中教審教育内容等小委員会審議経過報告—」『文部時報』、26-43、1983
- 7) 西谷美幸他：「自己教育力の動機づけとその効果」『保健科学研究誌』1、97-103、2004
- 8) 當山りえ、嘉数朝子：「高校生の学習統制感、原因帰属及び学習習慣の発達の研究」『琉球大学教育学部教育実践センター紀要』6、109-118、1998
- 9) 森 敏明・清水益治・石田潤：「大学生の自己教育力に関する発達の研究—回想的質問紙法による分析—」『広島大学教育学部紀要 第1部(教育学)』49、7-14、2000
- 10) 長谷部比呂美：「短期大学生の自己教育力に関する検討(1)」『淑徳短期大学研究紀要』48、107-121、2009